

長野県松本市

SHIBAZAWA

芝沢遺跡 I・II

MINAMIKURI

南栗遺跡 IV・V

— 緊急発掘調査報告書 —

2000.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成10・11年度に実施した松本市和田所在の芝沢遺跡第1・2次緊急発掘調査および松本市和田・島立所在の南栗遺跡第4A・4B・5次緊急発掘調査の報告書である。
- 2 本調査は中部電力株式会社による送電線梓分岐線の鉄塔移設に伴う緊急発掘調査であり、中部電力株式会社より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書作成を行ったものである。
なお、事業受託時の遺跡名は新村・島立条里的遺構ほか、としたが、各調査地点についてはより個別的な遺跡名を冠するべきと判断し、本書作成段階で標記の遺跡名とした。
- 3 本書の執筆はⅢ-6-(3)をバリソナーヴェイ株式会社が、それ以外と総括・編集については調査担当の沢柳秀利・荒木 龍・加島泰祐の助力を得て竹原 学が行った。
- 4 調査および本書作成に係る作業の分担は以下の通りである。
遺物洗浄・保存処理・復原 五十嵐周子、内澤紀代子、洞沢文江、百瀬二子
遺構測量 小松正子、村山牧枝、百瀬二子 遺構図整理 石合英子
遺物実測・拓影 上條信彦、菊地直哉、五十嵐周子、洞沢文江
トレース 櫻井 了、洞沢文江
写真撮影 沢柳秀利・荒木 龍・稲川大輔（現場写真）、宮嶋洋一（遺物写真）
- 5 本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。
竪穴住居→住、竪穴状遺構→竪、柱穴列→柱列、溝状遺構→溝、土坑→土、ピット→P
- 6 調査および本書作成にあたり、以下の機関・個人より協力・教示を得た。記して感謝申し上げる。
芝沢小学校、中部電力株式会社、松本市文書館、高桑俊雄、竹内靖長
- 7 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。

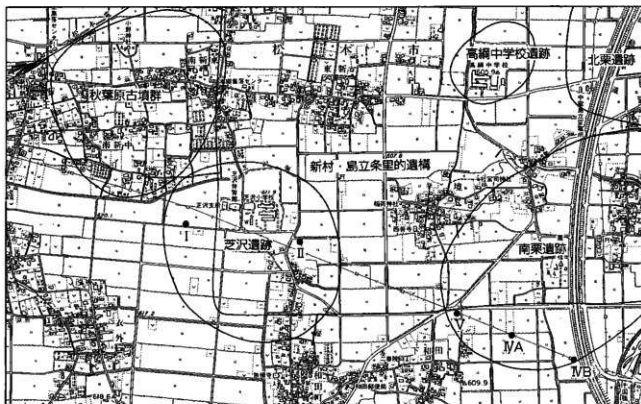


図1 調査地の位置と周辺遺跡

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

平成11年、松本市の西部、烏立・和田・新村地区内を通過する中部電力の送電線「梓分岐線」の鉄塔移設工事が計画された。この地域一帯は南栗遺跡等古代の集落遺跡群が分布し、また中世以降の条里遺構の推定地（新村烏立条里的遺構）として知られ、これまでに長野自動車道建設や圃場整備事業に伴って数多くの調査が実施されている。

そこで松本市教育委員会では事業主体である中部電力株式会社と鉄塔建設予定地内における遺跡の保護について協議を行い、当該地における遺構・遺物の有無について試掘調査を実施し、その結果から遺跡の保護措置について再協議を行うこととした。試掘調査は同年1月より順次行ったが、鉄塔建設予定地のうち5ヶ所において遺構・遺物が検出されたため、その都度関係者による再協議を行い、工事着手前に松本市教育委員会が該地点の緊急発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることとした。

2. 調査体制

調査団長 松本市教育長 守屋立秋（～10.6.30）、舟田智理（10.7.1～10.15）、竹淵公章（10.11.1～）

調査担当者 沢柳秀利、竹原 学、荒木 龍、加島泰祐、稲川大輔

調査員 今村 克

協力者 浅井信美、浅輪敬二、飯島由次、飯田三男、石合英子、石井脩二、内沢紀代子、遠藤美穂、開嶋八重子、上條道代、小松正子、鶴川 登、高桑俊雄、澗沢文江、村山牧枝、百瀬二三子、百瀬二子、百瀬義友、横山真理

事務局（平成10・11年度）

松本市教育委員会 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長、～11.3.31）、松井敬治（文化財担当係長11.4.1～）、久保田 剛、近藤 潔（～11.3.31）、武井義正（11.4.1～）、酒井まゆみ（旧姓上條）

II 遺跡の環境

芝沢遺跡、南栗遺跡は、松本盆地の西部、奈良井川左岸に広がる沖積低地上にあり、遺跡の標高は610～615mを測る。南栗遺跡はこれまでに中央自動車道長野野線建設や圃場整備事業により数多く調査が実施されており、古墳時代後期末に始まり、古代、中世へと継続する微高地上の集落遺跡群であることが判明している。

一方、芝沢遺跡は今回の調査ではじめて古代を主体とした遺跡の存在が確認されたもので、和田集落から芝沢小学校にかけての一帯に遺跡が広がっている可能性がある。遺跡の東には南栗遺跡をはじめとする古代の集落群である烏立遺跡群が位置し、一方、北西方向の新村地区には7世紀末から8世紀初頭かけて秋葉原古墳群や安塚古墳群が形成され、烏立遺跡群等奈良井川西岸域の開発に当たった初期集団の墓域とも考えられている。芝沢遺跡は両者の間に位置することとなり、これらの遺跡との関係が注意されるところである。

なお、烏立地区から新村地区にかけて、今回の調査地点を含む一帯は条里的景観の残す地域とされているが、これまでの烏立地区の発掘成果からそれが中世以降の産物であることが判明している。

Ⅲ 調査結果

1. 調査の方法と概要

調査方法 試掘調査の結果から、鉄塔建設予定地のうちNo23・25・28・29・30の4地点については遺構が見出されたため発掘調査が必要と判断した。各地点における調査手順は重機による表土除去→人力による遺構検出・掘り下げ・記録作業→重機による埋め戻し、である。なお測量記録にあたっては磁北方向をもとに任意の3m方眼を設定し基準とした。

基本土層 詳細は図に示した。芝沢遺跡1次調査地点では砂礫層中に古代の遺構が掘り込まれるが、これが2次調査地点では安定した黄褐色砂質土層となる。さらに、上層には中・近世の溝状遺構の掘り込み面がある。南栗遺跡では4A・5次調査地点で黄褐色砂礫層が地山となり、その上面で縄紋～中世各時期の遺構を確認した。4B次調査地点では灰褐色土層が中世以降の遺構掘り込み面である。

調査概要 調査地点個々の概要は以下の通りである。

芝沢遺跡第1次調査地点（芝沢Ⅰ、鉄塔No23地点）

所在地	松本市和田1040-2
調査期間	平成11年1月20日～2月23日
調査面積	150㎡
検出遺構	竪穴住居址 2棟（平安）
	土 坑 2基（平安）
	ビット 2基（平安）
	溝状遺構 1条（平安）

出土遺物 土器（土師器・黒色土器・須恵器）

芝沢遺跡第2次調査地点（芝沢Ⅱ、鉄塔No25地点）

所在地	松本市和田1154-2
調査期間	平成11年11月3日～11月26日
調査面積	100㎡
検出遺構	竪穴住居址 1棟（奈良）
	竪穴状遺構 2基（奈良・平安）
	柱穴列 1条（奈良・平安）
	土 坑 16基（奈良・平安）
	ビット 57基（奈良・平安）
	溝状遺構 1条（近世）

出土遺物 土器（土師器・須恵器）・陶器、土製品（土錘）

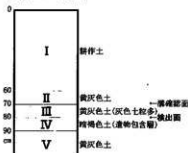
南栗遺跡第4A次調査地点（南栗ⅣA鉄塔No29地点）

所在地	松本市和田1514
調査期間	平成11年1月29日～3月3日
調査面積	28㎡
検出遺構	竪穴住居址 9棟（縄紋中期1・平安9）
	土 坑 6基（平安）
	ビット 13基（平安）

芝沢Ⅰ 西壁



芝沢Ⅱ 東壁



南栗ⅣA 西壁



図2 基本土層（1）

溝状遺構 2条(平安、1条は自然流路)

出土遺物 土器・陶器(縄紋・土師器・須恵器・灰釉陶器)

鉄器(鐵・刀子・釘・蹄鉄他)、鉄滓

南栗遺跡第4B次調査地点(南栗4B、鉄塔No30地点)

所在地 松本市島立5032-2

調査期間 平成11年2月24日～3月15日

調査面積 150m²

検出遺構 土坑 8基(不明)

溝状遺構 2条(近世1・不明1)

出土遺物 土器(土師器・須恵器)・陶磁器、鉄器

南栗遺跡第5次調査地点(南栗V、鉄塔No28地点)

所在地 松本市和田1495

調査期間 平成11年4月5日～4月23日

調査面積 54m²

検出遺構 土坑 9基(中世)

ピット 2基(中世)

溝状遺構 1条(中世以前)

出土遺物 鉄器、銭貨、人骨



図3 基本土層(2)

2. 芝沢遺跡第1次調査地点の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

①第1001号住居址

調査区西壁下で検出され、東壁に設けられたであろう張り出しカマドのみの調査となった。カマドの幅は96cmで、壁からの奥行き1.2mを測る大形のものである。火床面は深さ30cmで全面に焼土が厚く堆積、その上にあたかも敷き詰めたかのように10cm内外の礫が存在した。袖石は北側の1石が原位置で残存する。

遺物はカマド内より土師器・須恵器の小片が出土、うち土師器甕Aの口縁部片1点を図示し得た(1)。くの字状の口縁部、肩の張る胴部を有する。口縁部の内外はヨコナデを施し、胴部には内外面とも粗目のハケ調整を行う。これらの諸特徴から中央自動車道長野線調査報告書編年(以下、古代の時期区分と器種器形の名称はこれに従う)の5期前後に位置付くものと考えられる。

本址の帰属時期はカマドの形態や出土土器から8世紀末～9世紀初頭に位置付けられよう。

②第1002号住居址

調査区中央に位置する。南北3.6m・東西3.5m・深さ50cmを測る長方形の遺構で、土1001・1002、溝1を切って構築される。長軸の方位はN2°Eである。覆土は暗褐色土の単層で、遺構の中央から南壁下にかけての覆土中から床面上に10～20cm大を主体とする多数の礫が集積していた。床面は礫層中であり、北壁沿いには貼床が見られる。カマド、柱穴など屋内の施設は何ら見出されなかった。

遺物は礫群の周囲から3・7・8等の半完形品や破片の土器類と鉄器1点が出土、北東部の床面上にも土師器甕の破片が遺存していた。これらの土器類の器種・器形は土師器甕B(3)・小型甕B(2)・小型甕C(7)、黒色土器A杯A(4)、須恵器杯A(5・6・8～10)・杯B(11～13)があり、食器類の主体を須恵器が占めている。須恵器杯Aはいずれも底部に回転糸切り痕を残すが、5・6・9・10の縁に底径が大

1・2住遺物出土状況

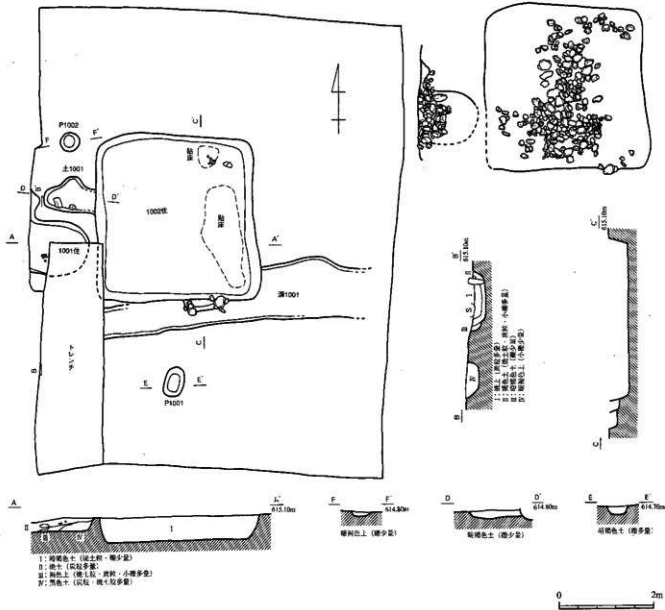


図4 芝沢遺跡第1次調査地点 検出遺構

きい古相を呈するものと、8の様には小さい底部と大きく外開する立ちあがり、粗いロクロ目等新しい様相を呈するものが見られる。土師器甕Bはハケ調整、カキ目、形態的特徴等、甕Bとして完成された形態である。32は土器以外の唯一の遺物で、刃部のみが残存する刀子の破片である。

出土土器群の時期は須恵器杯類や土師器甕類の形態・技法の特徴と器種・器形の組合せから6期に位置付けられ、本址の廃棄された時期もその頃と推定されよう。

(2) その他の遺構

土坑2基はともに1002住に切られ、あるいは住居址の付属施設である可能性もある。ピットは2基とも掘り込みは浅い。いずれからも遺物の出土はない。

溝状遺構は1002住に切られ、住居址の南辺を東西、すなわちN-75°-E方向に走る。幅0.6~1.3m・深さ10~15cmを測り、東西での高低差はなく底面は水平である。遺物は見られない。

3. 芝沢遺跡第2次調査地点の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

住居址は調査区北西隅において溝2001の底面で検出された第2001号住居址1棟のみである。区域外にかかるため調査は南側1/3程度にとどまった。東西長2.55mを測る方形の遺構で、東西軸方位はN-87°-Wである。壁高40cmを測り直に立ち上がる。覆土は暗褐色土を主体とし東側からの堆積が明瞭に窺えるが、各層ともに地山の黄褐色土ブロックを多く含み、人為的な埋土と捉えられる。

カマドは西寄りの床面に焼土粒が多く散ることから西壁中央に存在するものと推定される。ピットは南西隅と南東隅よりそれぞれ2～3基が切り合った状態で見出された。いずれも位置や深さから見て柱穴とは考え難く、また床面レベルまで貼られていた。

遺物は非常に少なく、覆土中より土師器・須恵器の破片が出土したのみである。土器類の器種・器形は土師器甕C、須恵器杯A・杯B・杯蓋Bがあるがいずれも細片で、わずかに須恵器杯蓋Bを1点図示し得たのみである(14)。本址の帰属時期はわずかな土器の特徴から見て奈良時代と推定されよう。

(2) 竪穴状遺構

調査区南東より2基検出された。方形で規模が大きいため土坑と区別したが特徴に乏しい。覆土はいずれも暗褐色の砂質土である。竪2001は竪2002に南側を切られ、さらに土2008とP2045により西壁を失う。また覆土上面からは土2007・2013が掘り込まれる。東西長2.0mを測り、南北軸方位はN-2°-Wを指す。壁の高さは12cmを測る。底面は平坦だが貼床や硬化面は認められない。竪2002は北壁を調査したのみで、大半が調査区外のため詳細は不明である。東西長2.3mを測り、竪2001より深く壁高は20cmを測る。

遺物はまったく出土していないが、色調等覆土の特徴から見て、2001住等と同様、本址は奈良時代に帰属する遺構と推定される。

(3) 柱穴列

調査区中央に東西方向にピットの集中が認められた。個々のピットについて検討した結果、P2004・2010・2056・2024については配置・形態・規模・覆土の特徴から一連のものと捉えられ、柱穴列とした。しかしこの遺構が構なのか、北側に展開する掘立柱建物であるのかは明らかにできなかった。

各ピットは直径35～50cm・深さ28～36cmを測り、覆土は黄色土粒を含んだ橙褐色土が見られる。各柱間は1.8m～2.3mの規模を有し、総延長は6.2mを測る。また、軸方位はN-88°-Wである。

遺物はP2024内より1/2程が残存する須恵器杯Aが出土した(15)。底径が小さく大きく外開する形態で、6～7期頃の特徴を示すものである。従って本址は平安時代前期に構築されたものと考えられる。

(4) 土坑・ピット

ピットと比較して相対に大きく、楕円形や不整形を呈するものを土坑とした。

土坑の大半は長径0.6～2.3m程の楕円形を呈するもので、15～20cm程の深さの浅いものである。覆土はいずれも暗褐色土を主体とし、住居址や竪穴状遺構と同様、奈良時代に帰属すると考えられる。土2005の1基のみこうした土坑とは様子が異なる。長径1.45m・短径1.0mを測る楕円形プランで、深さ60cmを測る。底面は中央部がゆるく窪み、壁の立ちあがりは垂直だが上部では埋没時の崩落によるものか、傾斜を増す。覆土は炭粒を多く含んだ間層を挟んで上層に灰褐色土、下層に暗褐色土が堆積し、壁の下半部と底面は被熱赤化する。出土遺物は土師器甕に付されたであろう角状の把手(16)と、棒状の土錘がある(17)。

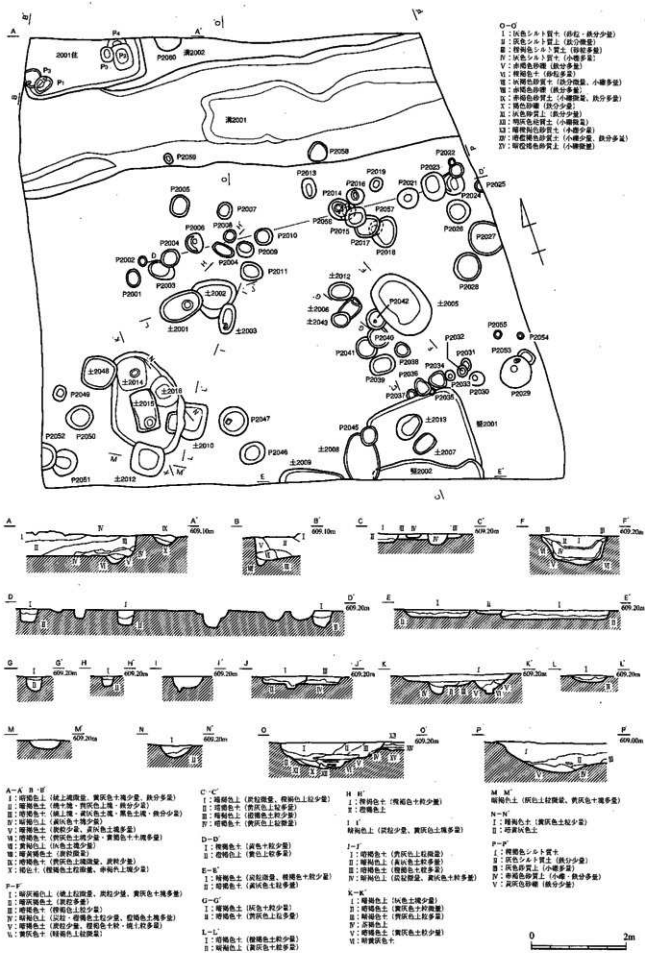


図5 芝沢遺跡第2次調査地点 検出土構

ピットは柱穴列や土坑2005の周辺において多く検出された。直径15～50cm・深さ10～30cm程度のものが主体である。柱穴列周辺には覆土が灰褐色のものが多く、柱穴列と同様、平安時代のものと考えられる。その他は暗褐色を呈し、多くは奈良時代のものであろう。

土坑・ピットからの遺物の出土は非常に少なく、図化・提示できるものはなかった。

(5) 溝状遺構

調査区北辺部より東西性の溝状遺構が検出された(溝2001)。さらに、溝の北辺を追求した結果、調査区北壁と溝2001のわずかな隙間にも浅い溝状遺構が存在することが判明した(溝2002)。

溝2001は検出面より上位の黄灰色土層中から掘り込まれる。幅は1.7～2.3mを測り、直線的にN-80°-W方向に走向する。断面形は底面にかけてゆるく弧状を呈し、検出面からの深さ50cmを測る。底面は高低差がほとんどなく、わずかに4～5cm東側が低い。覆土の状況から流路として機能し最終的にシルトで埋没したことが判明する。また覆土中には摩滅した土師器・須恵器片が多く含まれていた。遺構の時期は層位観察と、1点ながら灰色の施された薄手の陶器片の出土から中世以降のものと推定される。

溝2002は溝2001に切れ、また大半が調査区外にあるため全容は不明である。溝2001に比して浅く、検出面からの深さは20cm程度である。覆土は砂礫が堆積し流路として供されたと考えられる。溝2001とは連続的に造り替えられたものであろうか。遺物は覆土中より摩滅した須恵器甕の口縁部破片が出土した(18)。

4. 南栗遺跡第4A次調査地点の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

狭長な調査区北部より8棟の住居址が複雑に重複して検出された。そのうち縄紋時代中期の1棟(4004住)を除きいずれも平安時代で、同位置における建て替えの結果複雑な状況を示すに至ったと考えられる。

第4004号住居址 ほとんどが4001住に切れ、わずかに南壁と床の一部を調査するにとどまった。床面は検出面より深さ16cmを測る。覆土は暗褐色～茶褐色の砂質土が堆積する。

遺物は検出面および覆土中から同一個体の深鉢胴部破片5点が出土した。いずれも隆帯による大柄の渦巻紋(27～30)や蛇行懸垂紋(29・31)等が施された後、地に雨垂れ状の浅く短い幅広の沈線が充填される。これらの特徴から唐草紋系土器の新しい段階、中期末葉に位置付けられよう。

第4001号住居址 全体の約1/2を調査した。南北長3.3mを測り、南北軸の方位はN-16°-Eである。覆土は褐色土の単層で、検出面からの深さは25cm、床面は総じて平坦である。北壁下および中央部に浅い掘り込みが、また浅い円形ピットが3基検出された。調査範囲では火処は見当たらない。

遺物は覆土中から土器片、鉄器が少量出土した。土器類の器種・器形は土師器杯A(19)・椀(21)・甕、灰釉陶器椀(20)があり、3点を図示した。鉄器は釘が2点出土、1点を示した(34)。土師器杯Aは口径105cm・器高3cmで、灰釉陶器椀は底部に回転糸切り痕を残す。特徴的には概ね11～13期に位置づくものと考えられよう。その他特殊な遺物として、内面に鉄滓が溶着し熱のため器壁に歪みの生じた土師器杯1個体分の破片が出土した。その状況からみて堪憐的な用い方をされたものであろうか。4005住からも同様な破片が出土しており(23)、鉄器の存在とともに注意される。

第4002号住居址 4001・4003住、土4002等に切れ、北壁と床面の一部を残すのみである。壁の方向はほぼN-10°-Eで、床面までの深さは28cmを測る。覆土は灰褐色を呈し、10～15cm大の礫の集中が見られる。柱穴・カマド等の付属施設は見出されなかった。遺物はまったく出土していない。

第4003号住居址 4001住と土4002に切れ、東壁の北部～北東隅を残すのみである。検出面からの深さ

12cm、壁は4001住の東壁と平行である。壁下には周溝が設けられている。遺物は出土していない。

第4005号住居 4007住、溝4001等に切られ、南西隅のみの調査となった。南北軸方位はN-48°Eである。床面の深さは25cmで、砂礫層に厚く貼床を施し平坦な面を作り出す。また各壁下には幅10cm程の周溝が掘り込まれている。

遺物はわずかな土器片と鉄器が出土した。土器は土師器杯A又は碗、灰釉陶器碗があり、土師器杯A又は碗(23)は内面に鉄滓が溶着している。鉄器は全長27.1cm・刃部長17cm・刃部最大幅2.4cmを測る大形の刀子(38)と、最大幅10.8cm・奥行10.9cm・装着面の幅1.4~2cm・厚さ0.6~0.7cmを測る踏鉄が出土している。刀子は瀬側が無関、刃部側には緩い関をとり、刃は直線的である。踏鉄は使用により外縁部が摩滅し、先端部は上方に反りが生じている。目釘及び目釘孔は7ヶ所確認され、推定8ヶ所設けられるようである。うち1ヶ所では頭部の直径0.4cm・長さ1.9cmの目釘が抜けた状態で、踏鉄の外表面に付着していた。

第4006号住居 4007住に大半を切られ北東隅のみを調査した。推定南北軸方位はN-37°Eで、床面は深さ55cmを測る。覆土最下層には焼土・炭が多く含まれ、近辺に火処の存在を思わせる。遺物は少なく、完形の土師器碗(24)と刀子(33)が出土した程度である。土師器碗は小碗に分類されるもので、口径10cm・器高3.3cmを測る。12期以降に位置付くものか。刀子は刃部~柄部の破片で、無関である。

第4007号住居 4001住に切られ、北東部のみを調査し得た。残存部分から推定される南北軸方位はN-16°Eである。床面は平坦で深さは4006住とほぼ同一である。覆土は全体に焼土粒を含んでいる。床面には3基の円形ピットがある。遺物は土師器杯ないし碗と灰釉陶器碗の小片、馬具と思われるU字状の鉄器を得たのみである。

第4008号住居 4005・4009住、溝4001により破壊され、床面のごく一部を残すのみ。深さは4005住とほぼ同一レベルである。遺物はわずかな土器・陶器片と鉄器の身部を1点得たのみである(36)。鉄器は長三角形を呈する形態で、関はほとんど抉りこまれない。陶器片(26)は須恵器系の捏ね鉢口縁部の破片で中世のものであり、上層より混入した遺物と考える。

第4009号住居 4006・4008住の下から検出された遺構で、4008住に全体を貼られる。ピット3基を検出した。遺物は土師器杯の小破片が出土したのみである。

(2) 土坑・ピット

土4002を除く5基については円ないし楕円形を呈し、掘り込みの浅いものである。土4002は長辺1.5m程の隅丸長方形を呈するもので、直状の壁と平坦な底面をなし、15~30cmの深さを有する。住居址との切り合い関係から平安時代の遺構と捉えられる。

単独のピットは13基検出され、直径20~40cm・深さ10~30cm程のものである。調査区北端部に集中する。出土遺物は非常に少なく、P2より出土した灰釉陶器碗の破片(25)を図示し得たのみである。

(3) 溝状遺構

東西性の溝状遺構が2条検出された。溝4001は調査区北端にあり、全幅は不明である。走向はN-37°Eである。掘り込みは直に近く、明瞭に屈折して平坦な底面に接続する。検出面からの深さは65cmを測る。覆土は焼土粒や炭粒を含む褐色土で、中位には薄く焼土層が存在する。遺物は出土していない。このような特徴から、本址は住居址の一部を捉えた可能性も考えなければならないだろう。

溝4002は幅1.2~1.6m・深さ30cm内外で、断面形は緩く弧状を呈する。覆土はシルトや砂礫からなり、流路と考えられる。遺物は皆無である。

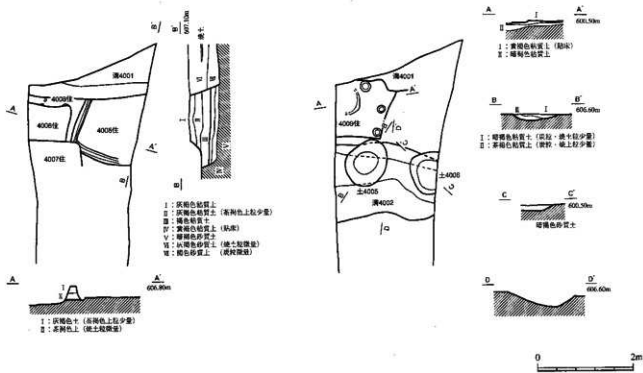
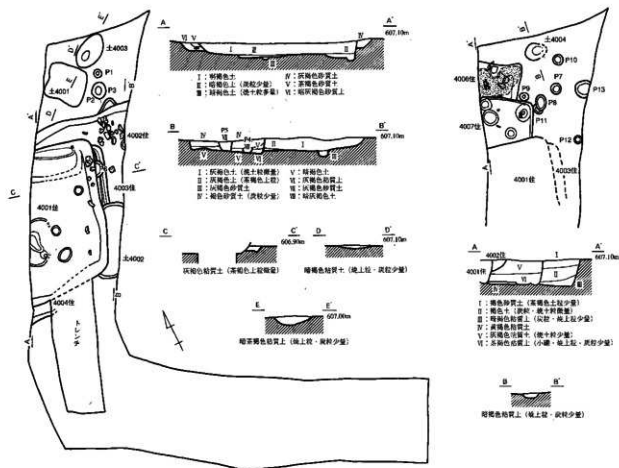


圖6 南栗遺跡第4A次調査地点 検出遺構

5. 南栗遺跡第4B次調査地点の遺構と遺物

(1) 土坑

調査区北東部に1基(土4007)ある他は南西部に集中する。土4007は南西隅のみの調査だが全形は方形を呈するものと考えられる。掘り込みは浅く検出面より深さ15cm程度である。西壁下には一部炭化物の集中する部分が観察される。その他の土坑は直径28~40cmの円形か、長径60~75cm程の楕円形を呈するものである。いずれも深さは10~25cm程度で、出土遺物はない。

(2) 溝状遺構

溝4002は一旦南西方向にのびた後、西に向きを変え幅員を増す。北東部での幅80cm・深さ6cm、西端部での幅1.7m・深さ8cmを測り、高低差は北東側で約10cm低い。溝4003は土4003と溝4002に切られ、南東-北西方向に走向する。全幅は不明で、深さ60cm前後である。いずれも出土遺物はない。

6. 南栗遺跡第5次調査地点の遺構と遺物

(1) 土坑

検出された9基の土坑は炭化材や焼土・人骨等を伴い、中世の火葬墓あるいは火葬に関連した施設と考えられるものである。調査区東部に分布するが、土5024のみ西部に単独で位置する。

土5017 南端部を未調査。西壁に突出部があり、東西軸方位はN-71°-Wである。東西長は88cmを測る。底面は深さ15cmだが、中央部から突出部にかけての東西中軸線上に溝状の掘り込みを設ける。覆土下層には骨片・炭片が多く含まれ、中央部には形状の判明するものが少量認められた。

土5018 南北長95cm・東西長75cm・深さ15cmを測り、西壁に突出部を設ける。東西の軸方位はN-86°-Wである。底面中央に小溝を設ける。壁は被熱赤化し覆土下層~底面には多量の炭・骨片が認められ、材の形状を残すものも多い。遺物は銭の断片が1点出土したが、銭銘は不明である。

土5019 土5018に東部を切られる。楕円形に近い形態を呈し、突出部は認められない。南北長62cm・深さ5cmを測り、東西軸の方位はN-51°-Wである。埋土には炭・焼土粒が認められたが、骨片は見られない。

土5020 南北長1.25m・東西長80cmを測り、西壁に突出部を設ける。東西軸方位はN-84°-Wである。底面中央には小溝を設ける。覆土下層にはかなり良好な状態で炭化材が遺存する。基本的には壁下に径3~5cmの材を枠状に配し、底面に径7~8cmの材を東半部では東西方向、西半部では南北位に敷いている。骨片はこれらの炭化材の上面に散る。遺物は銭3点が中央部の底面付近より出土、そのうち銭銘の判読可能な2点について図示した(40)。「皇宗通寶」と「元祐(豊?)通寶」の銘が確認できる。

土5021 南北長1m・東西長96cm・深さ30cm、西壁に突出部、底面中央に小溝を設ける。東西軸方位はN-92°-Wである。底面上には炭・骨片が多く遺存し、中央付近からは判読不能な銭4点が出土した。

土5022 大半が調査区外にあり、南端部のみの調査である。東西長72cm・深さ20cmを測る。覆土下層には多量の炭化材が見られた。

土5023 南北長1m・東西長72cm・深さ15cm、西壁に突出部を設ける。東西軸方位はN-71°-Wである。底面は中央に小溝を設ける。覆土は側壁側に焼土が多く見られ、底面上には炭化材が多量に遺存していた。出土遺物は銭が4点あり、1点は判読不能、3点はいずれも「洪武通寶」である(40~42)。

土5024 不整楕円形を呈する。南北長68cm・東西長52cm・深さ5cmを測る。覆土には炭粒や焼土粒が少量含まれていたが、骨片は見当たらない。

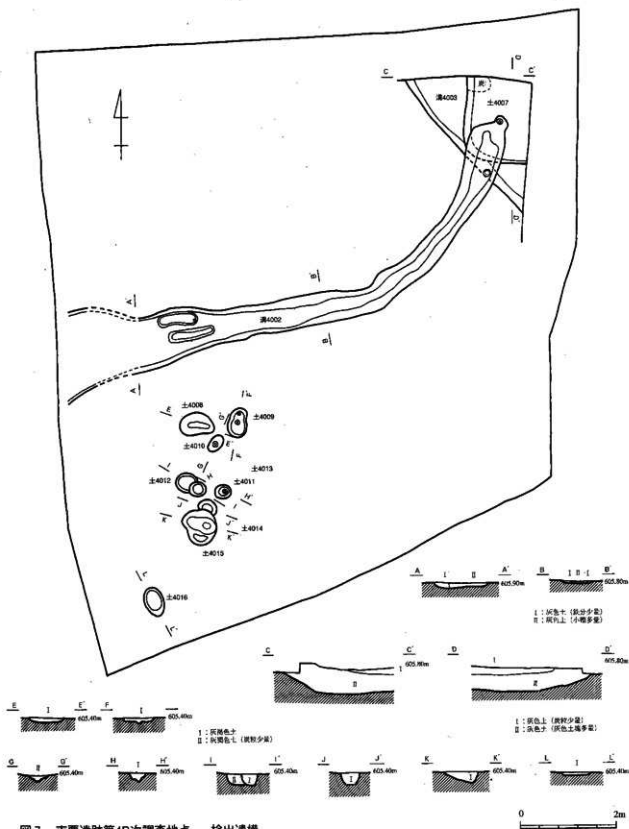
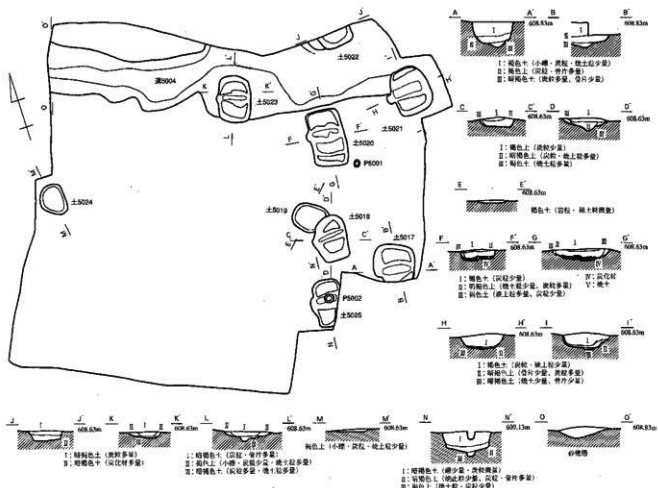


図7 南栗遺跡第4B次調査地点 検出遺構

土5025 本址埋没後P5002が掘り込まれる。南北長1m・東西長68cm・深さ40cmを測り、西壁に突出部、底面に小溝を設ける。東西軸方位はN-80°-Wである。下層～底面には骨・炭片が多量に遺存していた。

各土坑の時期 各遺構の時期比定についてはわずかに出土した銭と出土炭化材の放射性炭素年代測定に頼らざるを得ない(次項参照)。まず出土銭について。土5023の「洪武通寶」は初鋳が1368年であり、14世紀後半以降の遺構であることが判明する。次に土5038は「皇宗通寶」が初鋳1038年、「元豊(祐)通寶」が初



遺物出土状況
土5018



土5020



土5021



土5025



図8 南栗遺跡第5次調査地点 検出遺構

銅1078 (1086) 年であり、11世紀後半以降の遺構である。次に放射性炭素年代測定では土5018がB.P.250年となり、それが正しければ近世に下ってしまう。土5020はB.P.570年で、14世紀末の遺構ということになる。いずれのデータも参考とはなるものの、直ちに遺構の時期を決定するものではない。

(2) その他の遺構

土5020脇と土5025上より径12~20cm・深さ18cmの円形ピットが検出された。出土遺物はないが、土坑と近接した時期、すなわち中世の遺構と考えられよう。

調査区北辺部からは東西走する溝状遺構が検出された。西側での幅1m・深さ20cmを測り、東側では全幅を増し1.6m以上となる。東西での高低差は東側で8cm程低い。覆土は砂礫を伴い、流路と考えられる。

(3) 自然科学分析

はじめに

本遺跡では中世と考えられている土坑やピットなどが検出されている。土坑9基は火葬墓あるいは火葬施設と考えられるもので、内部からは多量の焼土と炭化材・炭化物および人骨らしい火葬骨が錢貨を伴って出土している。このような検出状況から、本遺跡は中世の墳墓関連遺跡として考えられている。

今回の自然科学分析調査では、上記の火葬墓あるいは火葬施設と考えられる土坑の年代に関する資料を得るために、土坑から検出された炭化材の放射性炭素年代測定を行う。また、燃料材の用材選択を検討するために樹種同定を行う。

①試料

試料は土5018および土5020から検出された2点を放射性炭素年代測定および樹種同定に選択する。土5018は100×75cm程の長方形の土坑で内部一面に焼土、炭化材が集中し周囲の壁は焼土化しているとされる。試料は北東隅の炭化材集中部から採取されたもので、火葬の燃料として用いられたものと考えられている。

土5020は125×75cmほどの長方形の土坑で土5018と同様に内部一面に焼土、炭化材が集中し周囲の壁は焼土化しているとされる。下層には棒状の木材を四角に組んでその上に板状の木材を並べたような状態で炭化材が遺存していた。試料は南西隅に並んだ炭化材の一部から採取されたもので、火葬の燃料として用いられたものと考えられている。

②分析方法

放射性炭素年代測定 測定は、学習院大学放射性炭素年代測定研究室の協力を得た。なお、年代値の算出には放射性炭素の半減期としてL1BBYの半減期5,570年を使用した。また、各試料とも同位体効果の補正を行った。

樹種同定 木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

③結果

放射性炭素年代測定 結果を表1に示す。得られた放射性炭素年代値は、A.D.1950からの年数でみれば土5018が17～18世紀、土5020が14世紀初頭になる。

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料名	試料	樹種	年代値	誤差(±)	δ13C	測定番号
土5018	炭化材	ハンノキ属ハンノキ亜属	250	50	-28.8	Gak-20430
土5020	炭化材	クリ	570	50	-27.6	Gak-20431

- (1) 年代値：1950年を基点とした値。同位体補正を行った値。
- (2) 誤差：標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代。
- (3) δ13C：試料炭素の13C/12C原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて算出した。

樹種同定 樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、落葉広葉樹のハンノキ属ハンノキ亜属とクリの2種類に同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus subgen. Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁手いまい対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものとも集合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

試料は保存状態が悪く、電子顕微鏡による観察は行えなかった。環孔材で孔圏部は1~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

④考察

遺構の年代 炭化材が出土した土坑は、いずれも火葬墓あるいは火葬施設と考えられ、炭化材は火葬時の燃料材と考えられている。今回の分析結果から、土坑5020の試料の放射性炭素年代値は遺構が中世と考えられていることとは整合する。一方、土坑5018の試料の年代値は中世よりもやや新しい。

放射性炭素年代と樹木の年輪などにより確かめられた暦年代との間には過去における大気中の¹⁴C濃度変化などに起因する「ずれ」があることが知られており、その「ずれ」は年代により数十年から数百年になることもある。最近では放射性炭素年代から暦年代に補正することも行われており、補正方法は欧米のデータに基づいて数種類ある。ただし、現時点では補正するためのデータも少なく、また、放射性炭素年代と暦年代が必ずしも1対1で対応するわけではなく年代によっては数100年以上の範囲にわたる複数の暦年代に対応する場合もある。

ただし、今回の場合はこの「ずれ」だけでは解釈できず、土坑418の年代は推定されている中世よりもやや新しい可能性がある。このことについては、検出遺物や遺構の状況、本遺跡の変遷等を考慮して検討したい。

炭化材の樹種 炭化材は、ハンノキ亜属とクリであった。土坑によって種類が異なることから、用材選択が異なっていた可能性があるが、試料数が少ないため詳細は不明である。

中世の火葬墓の燃料材については、各地で樹種同定が行われているが、特定の種類が利用されている傾向は見られない。このうち、神奈川県横浜市上の山遺跡では、コナラ節など4種類の木材、タケ亜科と共にテリハノイバラヤイネ科の葉なども検出されている（パリオ・サーヴェイ株式会社、1992）。この結果から、燃えやすい葉などを火付け材として利用していたことが推定される。また、主燃料である木材は、遺跡周辺で入手可能な木材を利用していたことが推定される。

本遺跡においても同様の可能性があると指摘できる。

引用文献

パリオ・サーヴェイ株式会社（1992）上の山遺跡植物遺体同定。港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XIII「上の山遺跡」, p.196-202, 横浜市埋蔵文化財センター。

IV まとめ

今回の発掘調査は2遺跡5地点に及んだが、各地点は100㎡に満たない小規模な調査面積である。しかし、まばらな点の連続ではあるものの、奈良井川西部一帯を横断して遺跡の所在や広がりを含むという点では初めての試みであり、その意義は非常に大きい。特に、今回和田地区において新発見の遺跡—芝沢遺跡を得たことで、南栗遺跡をはじめとする奈良井川西部の古代集落がこの地まで拡大していたことを物語っている。今のところ断片的に限られた情報からは、両遺跡間関係について連続的なものか、あるいはまったく別個の遺跡であるのかは判然としない。しかし、芝沢遺跡の北には奈良井川西岸域の開発にあたった初期集団の墓域とも考え得る秋葉原、安塚等の古墳群があり、両者をつなぐ重要な鍵を握る遺跡として、今後遺跡の実態解明が急がれよう。

最後に一連の調査に際しお世話になった方々に謝意を表して本書の締めくくりとしたい。

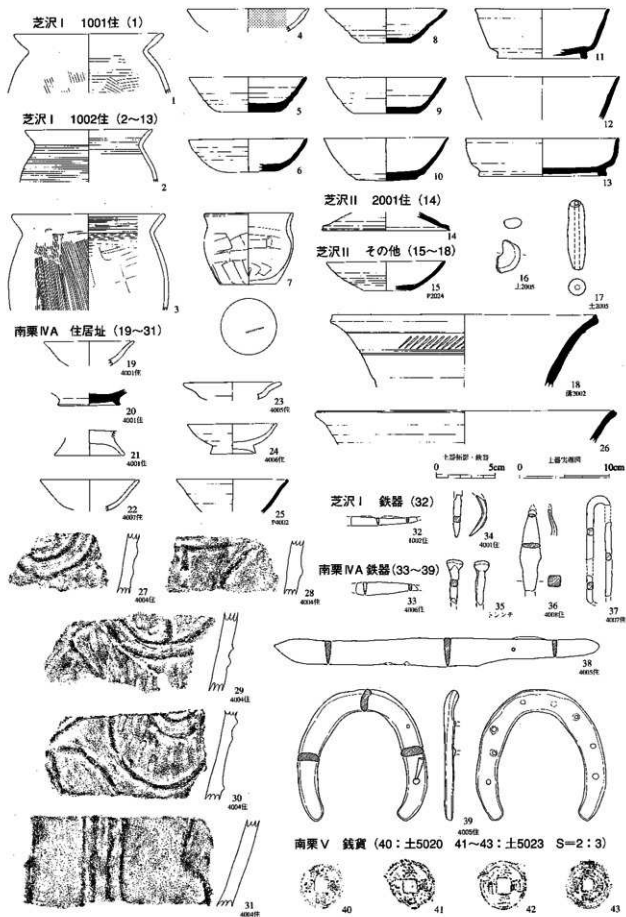
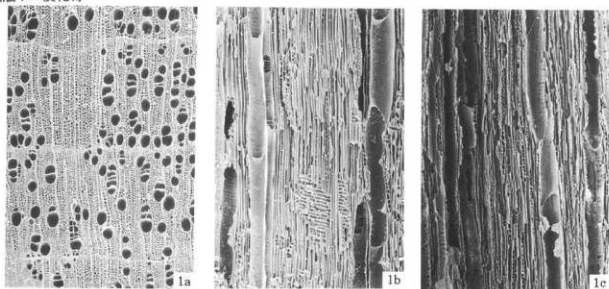


図9 各調査地点出土遺物

図版1 炭化材



1. ハンノキ属ハンノキ亜属 (土坑418)

a: 木口, b: 縦目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b, c

報告書抄録・奥付

ふりがな	しばざわいせき、みなみくりいせききんきゅうはつづくちようさほうこくしょ						
書名	芝沢遺跡Ⅰ・Ⅱ、南栗遺跡Ⅳ・Ⅴ緊急発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	松本市文化財調査報告						
シリーズ番号	№145						
編著者名	竹原 学、バリノサーヴェイ株式会社						
編集機関	松本市教育委員会 (松本市立考古博物館)						
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 (〒390-0823 松本市大字中山3738番地1 TEL 0263-86-4710)						
発行年月日	平成12年3月24日 (平成11年度)						
所収遺跡	所在地	コード (市町村-道路番号)	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
芝沢 (1次)	長野県松本市和田1040-2	20202	482	36°12'28"	137°54'55"	19990120~19990223	150㎡ 鉄塔建設 №23地点
芝沢 (2次)	長野県松本市和田1154-2	20202	482	36°12'26"	137°55'14"	19991103~19991126	100㎡ 鉄塔建設 №25地点
南栗 (4A次)	長野県松本市和田1514	20202	278	36°12'14"	137°55'48"	19990129~19990303	28㎡ 鉄塔建設 №29地点
南栗 (4B次)	長野県松本市島立5032-2	20202	278	36°12'11"	137°55'57"	19990224~19990315	150㎡ 鉄塔建設 №30地点
南栗 (5次)	長野県松本市和田1495	20202	278	36°12'16"	137°55'39"	19990405~19990423	54㎡ 鉄塔建設 №28地点
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
芝沢 (1次)	集落跡	奈良・平安	竪穴住居址 土坑・ピット 溝状遺構	2棟 4基 1条	土器・陶器 (土師器・須恵器・灰輪陶器)		奈良時代末~平安時代前期の集落址の存在を明らかにした。
芝沢 (2次)	集落跡	奈良・平安 中世	竪穴住居址 竪穴状遺構 柱穴列 土坑・ピット 溝状遺構	1棟 2基 1列 73基 1条	土器 (土師器・須恵器) 土製品 (土鍋)		奈良時代初頭と平安時代前期の集落跡の存在を明らかにした。 中世以降の溝状遺構の存在も重要である。
南栗 (4A次)	集落跡	縄文 奈良・平安	竪穴住居址 竪穴住居址 土坑・ピット 溝状遺構	1棟 9棟 19基 2条	土器 土器・陶器 (土師器・須恵器・灰輪陶器) 鉄器 (鏃・刀子・釘・馬具・蹄鉄) 鉄滓		南栗遺跡としては珍しい縄文時代中期末の住居址を検出。古代では馬具・蹄鉄の存在が目撃される。
南栗 (4B次)	集落跡	中・近世	土坑 溝状遺構	8基 2条	土器 (土師器・須恵器)		調査地点は古代、中世の集落外にあたるものか。
南栗 (5次)	墓地	中世	土坑 (火葬墓又は火葬施設) ピット 溝状遺構	9基 2基 1条	銭 人骨 炭化材		保存状況の良い中世の火葬墓、あるいは火葬施設が集中的に検出された。
印刷所	精美堂印刷株式会社						

